教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1980 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

人よりも神に従え

平和の元后のマリア(オスチア)での説教(四月二十日)

人よりも神に従わなければならない

(…)ローマの初代司教ペトロのことばに注目してくださるようお願いしたい。使徒行録に記されてあるように、ユダヤの衆議所にひきだされた残りの使徒と一緒にペトロが口にしたことばである。大司教は使徒たちを訴えて言う。「私たちはあの名で教えるなと正式に禁じておいた。それなのにあなたたちは、エルサレム中を自分たちの教えで満たしたではないか。そうして私たちの上にあの人の血を負わせようとするのか。」(使徒行録5・28)とくに最後のことばは意味ぶかい。我々の記憶にあるように、ピラトはイエズスへの宣告の責任のがれをするかのように、「この男の血について私には責任がない」(マテオ27・24)と言ったが、そこに集う群衆は衆議所の長老たちにそそのかされて、「その血はわれわれとわれわれの子孫の上にかかってよい」(マテオ27・25)と叫んだのである。

大司祭から(使徒行録5・28)のことばを聞いたペトロと他の弟子たちは答える。「我々は人間よりも神に従わなければなりません」(使徒行録5・29)と。そして、そのあとにつづくことばによってペトロの答えの意味が明らかになる。イスラエルの長老たちが使徒たちにキリストについて語ることをやめよと言うのに反して、神は使徒たちの沈黙をおゆるしにならない。「私たちの先祖の神は、あなたたちが木につけて殺したイエズスをよみがえらせ給いました。神は、悔い改めと罪のゆるしをイスラエルにあたえるために、右のおん手をもって、イエズスをかしらとし救い主として上げられました。私たちはこのことの証人です。そして、神がご自分に従う者にあたえたもう聖霊もまたその証人であります。かれらは、これを聞いて激しく怒り、殺そうとたくらんだ。」(使徒行録5・30〜33)

復活の神学

ペトロのことばのなかにわれわれは、キリスト復活の証言、つまり完璧な復活の神学をみいだす。(…)

人よりも神に従わなければならない。神は確実、不可謬の真理の源であるのに反し、人間の知識、最高の知性と言えどもそれが得る真理はつねに誤謬とあやまりの可能性を秘めている。思想史をふりかえれば哲学や科学における最大の権威者であっても時々あやまり、そのあとに続く人々がそれらの誤りを訂正することによって人間の知識を深めてきたことがわかる。これはまことにすばらしいものではあるが、あくまで人間の知識にとどまる。

ペトロと使徒たちは衆議所に立ったが、神ご自身はキリストにおいて、つまり、(その)十字架と復活において決定的にお話しになったことに気づきかつそれを絶対的に確信していた。ペトロと使徒たちは、直接に真理を受けた人々、時がきて聖霊をうけた人々と同じように、その証人となるべきであった。

信じるとは、「従う人に与えられる」(使徒行録5・32)聖霊の恩恵にたよりつつ、神からくる真理を、知性によって確信すること、神の啓示と教会の生ける「伝播」、つまり聖伝の教えを受け入れることである。この聖伝を伝える道具となるのがペトロと使徒たちおよびその後継者たちの教えである。

信じるとは教会が代々守る証言を受けいれ、その証言をもとに同じ確実性と内的確信をもって、その同じ真理の証人となることである。

時代が移るに従い、沈黙や真理の放棄、歪曲を要求してとる衆議所の方法は異なる。近年の衆議所は非常に異なると同時に数多い。これら衆議所の議員たちは、神的な真理をこばむ個々の人間であり、人間の思想や知識の体系である。それは、異なる世界観であり人間の行動についての異なる綱領でもある。さらに、世論、大衆文化、情報メディアによる種々の強制であって、いずれも唯物的で無神論的、不可知論的で反宗教的な色あいをもっている。近代の衆議所はまた、現代の政治形態であって、信仰告白を全然認めないわけではないにしても、少なくとも色々な手段でそれを制限し、信仰者を除外したり、第二級の階層であると考えている。しかしながらこれら近代の衆議所に直面する我々にとって、信仰の答はつねに同じである。「人間よりも神に従わねばなりません。私たちの先祖の神は、あなたたちが木につけて殺したイエズスをよみがえらせ給いました。神は、痛悔と罪の赦しをイスラエルに与えるために、右の御手をもって、イエズスをかしらとし救い主として上げられました。私たちはこのことの証人です。そして神がご自分に従う者に与え給う聖霊もまたその証人です。」(使徒行録5・29〜32)と。

代価を支払う

このように信仰にみちた返事をするキリストにおける兄弟、とくに時として我々よりはるかに困難な条件のもとにおかれている人々のことを考えてみよう。このような信仰告白をするために、高価な代償を払わなければならない人々のことを考えてみたい。それは、時には生命を失い、また時には自由を奪われて、社会から除外され、嘲笑のまとになる人たちのことである。

使徒行録によると、「使徒たちは、御名のために辱められるに足る者とされたことを喜びながら、衆議所を去った。」(5・41)このような証言は現在にもある。教会史のはじめに話されたペトロの「人間よりも神に従わねばなりません。」(使徒行録5・29)ということばはこのような人々のうちにあって同じ霊の力による実りを与えている。

高価な代償、大きな試練を経なければ信仰を告白できない人々のために、霊の力が彼らに欠けることのないようよく祈ろうではないか。

最後に、我々自身に目を向けよう。我々の信仰とは一体なんであろう。初代司教にペトロをいただくこのローマの人々の信仰とはどのような信仰なのだろうか。

衆議所においてペトロが告白した信仰と同じく唯一、明確な信仰だろうか。あるいは時としてあいまいなところを残す信仰なのか。疑いと迷いをまじえた信仰か、あるいは、傷だらけの信仰なのだろうか。人間的な考えに適合されたもの、流行、気持、意見にあわせた信仰なのだろうか。

我々はほんとうにペトロのことばを自分のことばにすることができるのだろうか。「我我は人間より神に従わなければならない」と。

我々の信仰のために祈ろうではないか。

若い世代の信仰のために祈ろうではないか。地球上のいろいろなところで、一人ひとりの人間がいろいろな試練を受けている。

弟子たちが湖で「主だ」(ヨハネ21・7)とキリストの現存に気づいたと同じように我々もキリストをみつけ、キリストに向って舟を進めることを可能にする物の見方・観点を失わぬよう努めたいものである。

ねがわくは我々が主から離れることを神がお許しにならないように。

枢要徳(すうようとく)について(上)

憶えておられるでしょう。ヨハネ・パウロ一世教皇は対神徳といわれる三つの徳——信仰・希望・愛について語られたことがあります。愛について語られたのが、最後でした。愛は聖パウロの最後の教えをなすものであり、その教えにもいうように(コリント前13・13)、ここ地上では、最大の徳です。愛だけが、生と死を分かつ境を越えていきます。信仰と希望を必要とする期間が終わっても、愛はさらにつづいていくからです。ヨハネ・パウロ一世はすでに、信仰・希望・愛の時代を通りすぎていかれました。教皇がこの地上で、かくもみごとにお示しになった愛は、ただ永遠のなかでのみ、十全なものとして、充たされるでしょう。

きょうはその他の徳について語らねばなりません。というのも、故教皇の覚え書からすれば、信仰・希望・愛という三つの対神徳だけではなく、四つのいわゆる「枢要徳」についても話そうというのが、そのご意向だったことを、このわたくしは知っているからです。ヨハネ二十三世教皇が、キリスト教徒の生活における「七つのあかり」とよびたもうたものについて、話をしようと、ヨハネ・パウロ一世はおもっておられたのです。

賢明の徳

さて、本日わたくしは、今は亡きヨハネ・パウロ一世教皇の準備されたこのプランにしたがって、話をすすめていきたいとおもいます。まず賢明の徳にみじかく触れましょう。この徳については古代の人びとも多くのことを述べています。その意味でかれらに対し、深い感謝の気もちをあらわさねばなりません。古代の人びとが、ある程度までではありますけれど、わたくしたちに教えてくれたのは、次のことです。すなわち、人間の価値は、そのひとが一生でなしとげた道徳的な善という物指で、測られねばならぬということです。これこそ賢明の徳が第一であることを保証してくれる考えにほかなりません。賢明なひとは、ほんとうの意味で善であるようなすべてのことを目ざして努力し、道徳的な善の物指にしたがって、あらゆる事柄、あらゆる状況、自分の全行動を計測しようとするのです。ですから賢明なひととは、よくいわれるような、世故にたけ、人生から最大の利益をひきだせるようなひとのことではありません。そうではなくて、まっ正直な良心の声にしたがい、健全な道徳のもとめに応じて、自分の全生活をつくりあげることのできるひとをいうのです。

賢明さは、わたくしたちそれぞれが神からあたえられている務めを果たすうえで、鍵ともいえる大切なものです。その務めとは、人間としての完成のことです。神はわたくしたちひとりひとりに、人間としての存在を、おあたえになりました。わたくしたちは、それぞれの分に応じて適切に工夫をかさね、この務めを果たしていかねばなりません。

しかしキリスト教徒たるものは、賢明の徳を、またちがった観点から見てもかまわないのですし、そうしなければならないのです。賢明さとは、神ご自身の英知を、人間という具体的な存在のなかに、いわば、映しだしたものであり、その英知に似せてつくられたものなのです。なぜなら、人間は「創世紀」でも知られるように、神を映し、神に似せて、創られたからです。しかも神はそのご計画を、創造の歴史、なによりも人間の歴史のなかで、実現されているのです。ご計画の目的は、聖トマスも教えているように、宇宙を究極において善いものとすることにあります。このおなじご計画は人類の歴史にあっては、すなわち救いのご計画であり、わたくしたちみなをつつみこむご計画になっています。ご計画が実現されたとき、その中心にはイエズス・キリストがおられます。イエズスにおいて、父である神みづから人間の救済のために抱きたもうた永遠の愛とご配慮が、いいあらわされたのでした。これこそまたどうじに、神の英知の欠けるところのない表現なのです。

いかにも、神の似姿たる人間は、これまた聖トマスの教えるごとく、ある点で英知——すなわち摂理そのものであらねばなりません。しかしそれは、あくまでも人間の生に応じた範囲でのことです。被造物はことごとく、創造を善いものとするという目的にむかって、進んでいきます。人間もこの偉大な行進に参加できるのです。信仰の立場から言うなら、人間は神の救いのご計画に参加する、ということなのです。救いにむかって進まなければなりません。自分を救うために、他の人びとの手助けをしなければなりません。他人に力をかすことによって、人間はみづからを救っていくのです。

わたくしは祈ります。わたくしの述べましたことを聞いてくださっている方がたが、賢明の徳がもつこの光のなかで、いまこのとき、ご自身の生活についてお考えくださるように。わたしは賢明だろうか。一貫して堅実な、責任のもてる暮らしをしているだろうか。ひとつひとつ実行にうつしている予定どおりの計画は、真の善のために、役だっているだろうか。こういったわたしの計画は、キリストと教会がわたしたちに望んでいる救いのために、役だっているのだろうか。学生や少年、少女たちが、きょうわたくしの話を聞いてくれているならば、賢明のこの光のなかで、見つめてほしいのです。家での勉学、読書のことを、

自分の関心や趣味のことを、友だちや異性の仲間のことを。家庭のお父さん、お母さんが、わたくしの話を聞いてくれているならば、夫婦の義務、親の義務について、すこし考えてほしいのです。大臣なり政治家なりの人びとが聞いていらっしゃるなら、そのさまざまな義務と責任とがおよんでいく広さに、目を向けてほしい。社会の、国の、さらには人類にとっての、ほんとうに善いことを、追いもとめておられるでしょうか。わが身ひとりのかたよった利益だけではないでしょうか。ジャーナリストや出版関係のかた、世論に影響力を発揮されるかたが聞いてくださっているなら、ご自分の影響がどのような価値と目的をもっているのか、ふりかえってほしいのです。

わたくしもまた、いまあなたがたに問いかけつつ、かえりみるのです。教皇として、賢明にふるまうために、何をなさねばならないか。すると、おもいうかびますのは、ヴェネツィア総大司教アルビーノ・ルチアーニが聖ベルナルドにあてた手紙の数かずです。このルチアーニ枢機卿への返事のなかで、クレルボーの大修道院長にして教会博士の聖ベルナルドは、治めるものは「賢明」であらねばならぬことをおもいだすようにと、とくに強調しているのです。それでは、あたらしい教皇は、賢明にその務めをやりとげていくために、何をしなければならないのでしょうか。そのためには実に多くのことをしなければなりますまい。こういった問題について、つねに学び、つねに黙想しなければならぬ。それはたしかです。しかし、さらにくわえて、何ができるのでしょうか。それは、助言のたまものとよばれる聖霊の御恵みをたまわるよう祈り励まねばなりません。そして、新教皇が教会の賢明な牧者になってほしいとおもわれるすべての人びとが、この教皇のために助言のたまものをくりかえし請いもとめてくださいますように。さらにご自分たちのためにも、善き勧めを賜う聖母の特別なおとりつぎによって、この恩恵をおもとめになるように。なぜなら、あらゆるひとが賢明にふるまい、力をにぎる人びとが真の英知をもって行動することは、当然おおいに望ましいことのはずだからです。

こうして教会が、聖霊のたまものにより、なかんずく助言のたまものによって、賢明につよくなっていくことができますように。そうすることで、すべてのものにとっての善という目的にむかい、偉大な行進と効果的に足なみをそろえ、参加していくことができますように。さらには、あらゆる人びとに、永遠の救いにいたる道を、さし示すことができますように。

正義の徳

わたくしの前任者、ヨハネ・パウロ一世は、信仰・希望・愛という三つの対神徳についてばかりではなく、四つの枢要徳についても語りたいと望まれました。それは、賢明・正義・剛毅・節制の四つです。この七つの徳ぜんたいで、成聖へひとをみちびく、いわば七つの灯になる、とお考えでした。神が永遠へとお召しになりましたので、ヨハネ・パウロ一世は三つの主要な徳をしか語れませんでした。信仰、希望、愛という徳は、キリスト教徒の生活ぜんたいをかがやかし照らすものです。その名に値しない後継者は、亡き前任者の精神の息吹を受けて、枢要徳について考察をかさねようとあなたがたにお会いし、亡き教皇の墓にかかげられた残りの灯に、ある意味で火を点じたいと願っています。

きょうは正義について話す番になりました。これを十一月最初のカテケージスの主題にするのは、たぶんいいことだとおもいます。この月は死者の月であり、わたくしたちは、最後の審判までを見とおして、個々人の生、どうじに全人類の生を見つめるようにと、いざなわれています。この移ろいやすい世界では、正義は精確には判定できないのだと、わたくしたちはみな、ともかく気づいています。「この世に正義などありはしない」とは、よくいわれることです。この科白はおそらく、あまりに安易な単純化をしすぎたはてでの結論でしょうが、それでも深く真実をうがったひとつの見かたを含んでいます。

正義は偉大なものです。それはある意味で人間よりも偉大ですし、人間の地上での生活のいろいろな要素よりも偉大、さらには、ここでの生活のなかで人間・環境・社会・社会集団・国家などといったもののあいだにうちたてられうるきわめて正当ないかなる関係よりも、偉大なものです。どの人も、正義に対するいやしがたい飢えを、なんらかのかたちで感じながら、生きて死んでいきます。人間は神に似せて創られています。そうした存在は、その人格の奥深いところにおいてであれ、人間としての生活のさまざまな面においてであれ、この世界では充分に満足させえないのです。だからこそ人間は、正義に対するこの飢えをてこにして、「正義そのものであられる」神に目を向けるのです。イエズスはこのことを「山上の垂訓」でたいへん明確にまた簡潔にいいあらわされました。「義にうえかわく人は幸いである、かれらは飽かされるであろう」(マテオ5・6)と。

福音書に述べられるこのような正義の意味を念頭におくと同時に、人間の地上での生活における基本的な要素としての正義をも考えねばなりません。それは、人間の生命、社会の生命、人類の生命の基本的な要素なのです。すなわち、正義の倫理的な側面です。正義は、人間の存在と人間の共存ということの基本原理なのです。人間の共同体、社会、国民それぞれの、またおたがいの存在の基本原理たることは、いうまでもありません。さらにいえば、キリストの教会とさまざまな社会組織が存在するための原理であり、ことに国家と国際組織の存立原理であります。かくも広汎で多様な領域のなかで、人間は、個人として、人類として、不断に正義をさがしもとめているのです。この努力は終わりなく絶えることなくつづいていき、ならぶもののないくらい大切な仕事です。

いろいろな関係がうちたてられ、さまざまな局面が展開するにつれて、それぞれにふさわしい定義が、いく世紀ものうちに、正義にあたえられてきました。交換に関する正義、ものの分配に関する正義、法律上の正義、社会上の正義、こうした正義の考えかたが生まれてきました。こうした正義の概念すべてからわかることは、社会や国家がなんらかの関係をむすぶとき、人間のあいだに成立する道徳の秩序に対して、正義がなんと根本的な意義をもっているか、ということです。人間が地上に存在していることの意味そのものが、正義と密接につながっているのだ、といえましょう。ひとりひとりが残りすべてのひとに「どれほどの負債を負っているか」、またどうじに、ひとりひとりに対し残りすべてのひとが「どれほどの負債を負っているか」、ひとりひとりがさまざまな組織やつながりのなかでたがいに「どんな負債を負っているか」、こういうことをまちがいなく見きわめ、なによりも実践していくことは、偉大なことであります。そうしてこそ人間は生きていけるのですし、そのおかげで、人間の生が意味あるものとなるのです。

ですから今でもなお、地上に人間が存在しつづけた時代のあいだずっと引き継がれている努力、社会生活のどのような面をとりあげても、正義にぴったりかなっているような、そういう社会をつくりあげようという持続的な闘いがおこなわれているのです。さまざま

不変の教え

な勢力や組織がくわだてる計画と活動とは、ときには変革をまねくようなものでありますけれど、敬意をこめて見ていかねばなりません。どうじに、そこでまず問題となっていることが、組織なのではなくて、正義であり人間なのだ、と気づく必要もあります。人間のために組織があるのであって、組織のために人間がいるのではありません。

したがって、組織の動脈硬化をふせがなければならないでしょう。わたくしが考えておりますと社会的、経済的、政治的、文化的なしくみは、人間に対して、完全な善になろうとすることに対して、鋭敏であらねばならないのです。人間の真のありかたにとって欠かせないことがらに則して、組織じしんを、組織そのものの構造を、改善していけるものでなければなりません。今日では、現代における人間や国民、国家の生活の「人権」確立を目ざして、たいへんな努力が払われていますけれど、それは、いま述べたような視点に立ってこそ、評価されねばならないのです。

現代の教会も、現代世界の最前線で、持続的な対話をつづけています。それは、歴代教皇の回勅や第二ヴァチカン公会議の教えに見てとれるとおりです。現教皇も、やはり、こうした問題に、くりかえし立ちかえるつもりでおります。きょうのような短い解説では、この広汎かつ多様な領域に、注意をうながすことしかできません。

わたくしたちはひとりひとり、正義ときりむすぶ関係のなかで生きていくことができねばなりません。さらにいえば、わたくしたちはそれぞれ正しくあらねばなりませんし、正しく行動しなければなりません。それは、身近な人びとに対してであり、遠いところにいる人びとに対してです。また自分が属している社会に対してであり、さらに神に対してもです。

正義はたくさんのことに関係があり、そのありかたもさまざまです。正義にはまた、人間が何を神に「負っている」か、という神に対しての一面もあるのです。それ自体、厖大な主題です。触れないですますことはできませんが、今その主題をくわしく述べていくつもりはありません。

目を転じて、人間を注目することにしましょう。キリストは、隣人を愛せ、とお命じになりました。このご命令のなかにはまた、正義に関係するすべてのものも、含まれています。正義がなければ、愛はありません。愛は正義に「超えまさる」でしょうが、どうじに、それが真の愛かどうかは、正義によって明らかとなるのです。親はその子を愛します。しかし、その子に対して正義をおこなわねばなりません。正義があいまいにされれば、愛もまた、あやうい目に会うのです。

正義のひとであるとは、それぞれのひとの当然のむくいを、それぞれのひとにあたえているということです。世間的なもの、物質的なものに関係します。その意味でのいちばんよい例は、仕事に対する給料でありましょうし、自分の労働の成果や自分の土地の作物を受けとることができるというような、一種の当然の権利とよばれるものでありましょう。しかし、人間が受けとってよいものには、ほかにも、そのひとにふさわしい名声とか尊敬、他人がしてくれる配慮、評判も、あるのです。あるひとを知れば知るほど、そのひとの人間味、性格、知恵、こころが見えてきます。そして、ますますはっきりと、どのような基準で「そのひとを計る」べきか、そのひとに対して正義をおこなうとはどういうことなのか、わかるようになるのです。わからねばならないのです。

ですから、しなければいけないのは、正義についての知識をたえず深めていくことです。それは、理論で組みたてられている学問ではありません。力をそなえた徳であります。人間の精神が、意志が、また、こころがもっていて、いつでも実行にとりかかっていける力、それが正義です。正義のひとであるために、そして正義のひとであるにはどうしたらよいかを知るために、祈ることもまた必要です。

主のみことばを忘れることはできません。「ひとをはかれば、それと同じはかりで自分もはかられるのである。」(マテオ7・2)

正義の人とは「正しいはかり」をもった人のことなのです。

わたくしたちみなが、そうでありますように！

そのようになれる努力を、わたくしたちがみな、つづけていきますように！

愛の贈物を受けよ

仏カトリック学生巡礼団へのことば（四月五日）

（…）ペトロを中心に集う使徒たちへの質問をキリストは諸君にもくりかえされる、「私をだれだと思うのか」と。あなたがた一人ひとりが心のなかで答えなければならない。おそらく周囲をとりまく不安と疑いの雰囲気に影響されて自分だけの力と考えだけでは答えることができないかもしれないが、教会は聖ペトロにならって諸君のために唯一の適確な信仰告白をしている。「あなたは生ける神の子キリストです」と。この信仰は諸君が洗礼を受けたときに種として、能力、潜在力として与えられた。そして、浮き沈みはあっただろうが、諸君は幼年少年時代を通して徐々にその信仰を自分のものとしてきた。聖霊が心のなかでその信仰を照らし強め、神への愛を大きくしてくださったのです。

私はローマの初代司教、第一の使徒と共にみなにくりかえしたい。「あなたたちはイエズスを見なかったのに彼を愛し、見ないのに信じている。それはあなたたちにとって言い尽くせぬ輝かしい喜びのもとである。その信仰の報いとして霊魂の救いを受けると保証されているからである。」(ペトロ前1・8～9)

ねがわくは諸君がキリストとその教会にゆるぎのない愛を保たんことを。我々はどなたに信をおいているか知っているのであるから、信頼と平安とよろこびのうちに主を受け入れようではありませんか。(…)聖パウロが言うように復活されたおん方が諸君を「とらえる」ために、そして、信仰と人々との平和、真理と純潔、ゆるしと愛に生きんとする諸君を邪魔するものから解放し、神的ないのちに再生させるための神の力をそそぎこむために、すでに諸君をとらえておられる。我々が心を開きさえすれば、神の救いのみわざをさまたげうるものは何ひとつ存在しないのです。たとえ救いからはるか遠くにいるように思えても信頼心を失わないで欲しい。

諸君をとらえる神の愛は無償の贈物です。感謝の心でうけとってください。そして、あなたたちの家族、町、学校など世界のあらゆるところで、同じ若者たちの間で、神の証人となろうではありませんか。ある意味で、兄弟たちへの神の愛の秘跡となり、人々がみずからの生活に救い主をうけいれるよう招こうではありませんか。疑うことに長け、無責任と憎悪にみちた世界にとっては、これが再生の機会となります。これこそ救いにほかならないのです。

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説ないしにそのまま伝える月刊紙　■毎月二十五日発行　■定価　一部六十円送料五十円　■半年分予約三百六十円送料三百円■一年予約七百二十円送料六百円（一部の送料で三部迄送付可能）■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
072393